とある侍の銀魂 (シルバーソウル)

白い奇術師

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
とある侍の銀魂　（シルバーソウル）

【Ｎコード】
Ｎ２８９４Ｙ

【作者名】
白い奇術師

【あらすじ】
これは銀時達がフェイト達と共にジュエルシード事件を解決したあとのお話。
銀時が今度いくところは科学が発展した都市、その名も『学園都市』。科学と魔術が交差するこの場所で銀さんは能力者と魔術師相手に大暴れ！

とある侍の銀魂　（シルバーソウル）（前書き）

新しい作品ですよろしくお願いします　ｂｙ作者

とある侍の銀魂　（シルバーソウル）

ここはかぶき町にある万事屋銀ちゃんという何でも屋。万事屋銀ちゃんで社長椅子に座り、ディスクの上に足を乗せ、ジャンプを見ている黒い服とズボンの上に着崩した白い青い波柄の着物を着た、銀髪天然パーマの死んだ魚のような目をした男性がいた。そうその人こそ、この万事屋銀ちゃんのオーナー『坂田銀時』ある。

銀時はこんなダメ人間ではあるが、知り合いのカラクリ技師がつくった転送装置で違う世界にいったさいに魔法少女と出会い、さらにはそこでとある事件を解決したのである。
今は元の世界に帰っている。ちなみにその装置、ここで働いてる従業員が壊したため使い物になりません。そのため転送装置壊した従業員は知り合いのカラクリ技師と共に転送装置を修理しているのである。

「ふぁあ～…ひまだな…新八と神楽と定春はお妙の買い物手伝っていねーし…シロは源外のジーさんのところに行ってるし…フェイトと話そうにも無線機にうどんの汁こぼして今、修理中だし…」

銀時はでかいあくびをしたあと、ひまだと呟く。
ちなみに新八と神楽はここの従業員で、定春は万事屋のペット、お妙は新八の姉、シロは転送装置を壊した従業員、源外は知り合いのカラクリ技師、フェイトは銀時が違う世界で知り合った魔法少女である。

「そうだ！シロの部屋からマンガでも借りるか」

銀時は立ち上がり、自分の寝室へと行く、寝室の戸を開け寝室の押し入れの戸に張ってあるドアが描かれているポスターの前に立つ、ポスターのドアノブ部分に手をおくと、ドアが開く。なぜ、こうなるのかというとこれはシロが使う亜神術である。亜神術に関してはリリカル銀魂のほうを見てください。

「さーてと、今日はこち亀でも見るか…」

銀時はシロの部屋へと入っていく、この部屋はシロの寝るのにしようする布団を含め、いろいろなマンガや本、などの娯楽がある戸棚があった。

「ん？」

銀時はテーブルの上に何かあるのに気づいた、それは白い色した携帯電話だった。

「ケータイ？あいついつの間にこんなもの買ったんだ？」

銀時はシロが買った携帯電話だと思いながら、携帯電話を掴み、自分の前まで持ってくる。

「……」

銀時はシロのケータイを見て、考えてた。

「開けてみよ」

銀時は興味本意で携帯電話を開く。

開けて見ると何もうつってない黒いディスプレイ画面が無数の文字が埋まり、ディスプレイ画面が白に変わる。すると、画面から粒子のようなものが出て、銀時の左手首にまとわりつき、銀色のデジタル腕時計へっ変わる。

「な…なんだこれ！？」

銀時は急に腕時計が現れたことに驚き、携帯電話を自分の足元に落とす。

すると…

「ん？」

銀時は足元に違和感を感じた。恐る恐る足元を見てみると白い円形の形をしたものができ、銀時はゆっくりと白い円形に沈んでいく。

「な…なにこれェェェェ！！」

銀時は叫ぶがどんどん沈んでいき、もう腰の方まで沈んでいた。

「ふんごぉおおおおお！！」

銀時は歯を食いしばり、円形のふちを掴んで脱出を試みる。

みるみる銀時の体が白い円形から出てくる。

「ふんごぉおおお…ってあれ？」

銀時は歯を食いしばる表情から間抜けな表情へと変わる。

「止まった…のか？」

銀時はふちに手を掴んだまま、白い円形を見回した。そう、沈むのが止まったのだ。

だがしばらくすると…

「ぎゃあああああああああああああああああああああああああああああああああああ！！！！！」

銀時の体は急に早く沈んでしまった。

銀時が完全に沈むと白い円形も小さくなり消えてしまった。

とある侍の銀魂　（シルバーソウル）（後書き）

質問をお願いします　ｂｙ作者

第一訓　来た場所は見知らぬ場所だった（前書き）

シロ「作者さん何でこの作品作ったの？」

作者「やってみたかったから」

シロ「……そう」

第一訓　来た場所は見知らぬ場所だった

「う…う～ん」

銀時は意識を取り戻し目を開ける、体を起こし辺りを見回した、そこはどこかの路地裏だった。

「あれー…もしかしてまた、違う世界に来ちゃったかなー…」

銀時は違う世界に来たと思いながら、ひきつった笑みを浮かべる。

「しかたね…寝るか」

銀時は開き直り普通の表情になる。寝ることを思いついた銀時は横になり再び寝る。

「がーごーがーごーＺＺＺ」

銀時はいびきをかきながら完全に眠りに入ってしまった。

「でさーそれでよ…」

「おい、あれ見ろよ！」

すると６人のいかつい顔した不良グループが話しをしながらやって来て、グループの１人が銀時を見つけ指差す。

「何だこいつ？」

「知るか」

「しかし、見慣れねぇ服着てんなこいつ」

不良グループは銀時に近づき、ある人は誰かと考え、ある人は知るかと答え、またある人は銀時の服装を珍しそうに見つめる。

グループの中で一番ガタイがいい男性が銀時のすぐそばまでやってくる。おそらくリーダーであろう。

「いつまで寝てんだ？起きろよオラァ！！」

リーダーは銀時の腹に蹴りを入れこむ。

普通の人なら、痛みで起きて悶え苦しむ蹴りである、しかし、それは普通の人ではの話し、銀時は普段コンクリートを破壊するような攻撃を受けて生活をしてる人なので、今の不良の蹴りなんて効くわけがない。正直今の蹴りの威力はダメガネの新八よりも弱かった。

「何なんだよ…せっかく気持ちよく寝てたのによぉ……」

銀時は眠りから覚めて、何事もなかったように立ち上がる。

不良のグループの中で、最も力が強い男の蹴りを無防備な腹に受けたにも関わらず、銀時は何事もなく立ち上がる。

不良グループから見れば、銀時の反応は常軌を逸しているものである。

しかし、その反応を見て男達はある一つの確信を得る。

「テメェ…もしかして能力者か？」

リーダー格の男が銀時に尋ねる。

「は？能力者？」

銀時は聞き慣れ言葉を聞き、訳がわからないような表情になる。

「とぼけてんじゃねーよ！俺の蹴りをくらってそんな涼しい顔でいられるわけねーだろ！」

リーダー格の男が銀時に向かって怒鳴る。

（能力者？もしかしてシロや魔導師と同じようなことができる奴らなのか？）

銀時は能力者と言う言葉で頭がいっぱいで男の言ってることなど聞いてなかった。しかし、ふとある言葉を思い出した。

（あれ？腹に蹴り？）

銀時は腹を見た、そこには服に蹴られて汚れたあとが残っていた。

「能力者だとわかったら、ただで帰すわけにはいかねー…って聞いてんのかテメェ！」

何やらぼーっとしている銀時にリーダー格の男は怒鳴る。

「おい、これはテメェがやったのか？」

「あ？はっ！だったら何だってんだよ！」
銀時の言葉に一瞬戸惑うが、リーダー格の男は続ける。
「俺これしか服持ってねーのに…」
銀時はそう言いながら握りこぶしを作る。
「何汚してんだテメェエエエエエエエ！！！」
バキッ！
「ぐへっ！」
ドサッ！
銀時はリーダー格の男の顔を殴りつけ、男は3メートルくらい飛び、地面に叩きつけられ気絶する。
「り…リーダーァアアアアア！？」
「よくもリーダーを…テメェらまとめてかかれ！」
「「「おお！！」」」
リーダー格の男がやられたことに叫ぶ人もいれば、リーダーのために銀時をやっつけようと残りのグループをに指揮するやつもいれば、その指揮に従うやつもいた。
しかし、相手が悪かった。

☆

「うう……」

辺りに呻き声が聞こえた。
声の主は、一人だけ立っている銀時の周りに倒れている不良グループであった。
「…テメェ……化け物かよ…」

一人の男が絞り出すような声で言う。

それもそのはず。
銀時はリーダー格の男を抜いた、不良グループと銀時つまり、５ｖｓ１という状況にも関わらず、不良グループは銀時に触れることはかなわず、あっという間に銀時に倒されたのだ。
拳一つで、しかも一撃で倒されたのだ。

人数が勝っていると油断をしていた面があったが、そんな言い訳で片づけられないほどの実力を感じるしかなかった。

「テメェ…何て能力使いやがった……」

仰向けに気絶していたリーダー格の男が顔を上げ無能力者なのにも関わらず、この世界で常軌を逸した実力を持つ銀時に疑問を持ち尋ねる。

「あ～…んじゃあ『糖分王』で」

銀時は考えたあと、適当に答えた。

（（（んな能力あるかよ～…ガクッ））））

不良グループはそう叫びたかったが、思うように声が出ずに再び意識が闇に落ちたのであった。

第一訓　来た場所は見知らぬ場所だった（後書き）

とりあえず質問プリーズ！

第二訓　お嬢様口調の人っているのかな？（前書き）

シロ「一応、今回はとあるシリーズの原作キャラがでてくるよ、誰だかわかるかな？それより、僕の出番まだかな～」

第二訓　お嬢様口調の人っているのかな？

「さ～て、これからどうするかが問題だが…」

不良グループをボコり終えた銀時は頭をかきながらこれからどうするかを考えていた。

「ちょっと、そこのあなた」

「ん？」

後ろから声が聞こえてきてので、銀時は後ろを振り返った。
そこには、夏服らしい半袖の学生服と薄い茶色のベストとミニスカートを着用し、赤い髪をツインテールにしている少女が立っていた。

「風紀委員（ジャッジメント）ですの。スキルアウトがよってたかって人を襲っていると報告を受け来てみましたが…」

少女は『風紀委員』と書かれた緑色の腕章を見せた後、少女は倒れている不良達ことスキルアウトを見ながら言い続ける。

「どうやらあなた一人でスキルアウトを片付けたらしいですわね」

そして、少女は銀時に顔を向けて言う。

「（え？スキルアウト？ジャッジメント？何だよそれ…とにかくあのガキに捕まっちまったらなんかめんどーなことになるな…とにかくここから離れるか…）あ～そうなんすよ。こいつら金よこせって

言うもんでさ、そんで俺が断ったら、急にキレて襲いかかってきたんだよ。そんで、俺が反撃をしたわけ」

銀時は勘で目の前の少女に捕まればめんどーなことが起きると予想し、適当なことを言ってごまかす。

「なるほど…ですからスキルアウト達が全員伸びてたわけなのですね」

少女は銀時の適当な言い訳を信じたのか、腕を組みながら納得する。

「そ、そうなんすよ！じゃあ、俺は用事があるからこれで…」

銀時は少女に背を向けて、走ってこの場を立ち去る。

「ちょっと、お待ちなさい！まだ話しが…って速っ！」

少女が銀時を止めようとするが、少女が止める前に銀時がすごい速さこの場から逃げる。

銀時の常人を越える速さを見て少女は驚く、こうして少女が驚いてる間に銀時の姿はもう見えなくなっていた。

「一体何だったんですの？」

一人この場にポツンと立っている少女はこう言うしかなかった。

☆

その頃、銀さん

「よーし、ここまで来たら大丈夫だろ…」

少女から逃げて来た銀時がいた。

「さーて…本当にこれからどうしよう…」

銀時はさらにこれからどうするか考える。

『とりあえず…服装変えたら？何かこの世界では目立つようだしその服』

どこからか声が聞こえてきて銀時に服装が目立つと指摘する。

「服変えるって…そんな金どこにあんだよ…って俺だれと話してんだ？」

頭をがしがしとかいて答える銀時だが、自分が誰と話しているのかという疑問を持つ。

『ここですよ。ここ、旦那さんの左手首にいます』

「は？左手首？」

声の主が左手首にいると言い、銀時は左手首にある銀色のデジタル腕時計を見る。

『どうも旦那さん』

「あ…どうも…」

腕時計があいさつをして、銀時も普通にあいさつを返す。

『あれ？しゃべるデジタル腕時計が目の前にあるのに驚かないんですか？』

「しゃべる刀とか、亜神とか、魔導師とか見てきたんだ。しゃべる腕時計ぐらいでもう驚きゃしねーよ」

デジタル腕時計の質問に銀時が答える。

「つーか、テメェは何者だ？」

銀時は目を細めながら腕時計に尋ねる。

『あ！紹介していませんでしたね。私はシロ様に作られたつけてるだけで簡単な亜神術と腕時計としつの機能が使える簡易亜神術使用補助機のウォッチです。以後お見知りおきを』

腕時計ことウォッチは銀時に自己紹介をする。

「なんでシロはテメェを作ったんだ？」

バンバンと亜神術を使ってるシロの姿を思い浮かべながら、なぜシロがウォッチを作ったかと銀時が尋ねる。

『はい、シロ様は亜神術を使うためのエネルギーは無限にありますが、亜神術を使い続けると頭が痛くなったりと体に負担がかかるのです。ですから負担を軽減するために簡単な亜神術を使う際に負担がかからないように私が作られたわけです』

「なるほど…」

ウォッチの説明に銀時は半分納得する

『あと私は試作機ですが、人間にも使えますし、服を変えることぐらいならできますよ』

「マジでか！？」

「はいマジです旦那さん」

ウォッチの言葉に銀時はマジかと尋ねウォッチもマジですと答える。

「……」

『どうしたんですか旦那さん？そんな思いつめた顔をしちゃって』

銀時が何かを考えていたので、ウォッチが声をかけてみる。

「なあ…一ついいか？」

『なんですか？』

銀時の一言にウォッチは尋ねる。

「服を変えた時にお前がとれたら、俺もしかして全裸に…」

『なりません！とれても元着ていた服装に戻るだけです！試作機だからと言ってなめないでください！つーかそれどこのＴｏＬＯＶＥるですか！』

銀時の言葉を聞いたウォッチはツッコンだ。

「わかったって！つーか、うるせーよ、長げーよ、くどいよお前のツッコミ」

『なんですと！』

銀時は理解したあと、ウォッチのツッコミを指摘する。指摘されたウォッチは声を上げる。

「ともかく、シロが助けに来るまでの間よろしく頼むわウォッチ」

『えっ？…あっはいわかりました旦那さん』

銀時が急に自分のことを頼ってくれてることに言葉を無くすも、すぐにわかりましたと答える。

「じゃあ、まずは自然にとけ込めるくらいの服に変えてくれねーか？」

『わかりました。では…トランス　スーツ』

ポンッ

銀時のリクエストに答え、ウォッチは変身系及び変装系亜神術をトランスを唱える。
銀時の体が白い煙に包まれる。煙がおさまると服が変わった銀時の姿が出てきた。

『どうですか？自然にとけ込めそうな服ですよ』

「どこが自然にとけ込める服なんだぁぁぁ！！？」

銀時は怒鳴った、なぜなら銀時の着ていたのはアリクイみたいな顔の白い毛に包まれた二足歩行の生き物の着ぐるみ…つまりトリコに出てくるＧＴロボの着ぐるみを着ていたからだ。

「俺が言ったのは周りの奴らととけ込める服装だ！確かに自然ならとけ込めるけど！ここじゃ浮くから浮きまくりだから！」

銀時はウォッチに向かってツッコミまくる。

『わかりました。では、次はドラゴンボールの悟空がいつも着ている服で…』

「話し聞いてたぁぁ！！？」

ウォッチは理解したと自分で言いながらも、真面目なのかふざけてるのか悟空の服をチョイスする。
銀時はまた、ウォッチにツッコミを入れた。

その後、いろいろウォッチと口論になり１０分後にようやく白衣とワイシャツ、だらしなくつけたネクタイ、ズボン…すなわち銀八先生の格好になったとのこと。

第二訓　お嬢様口調の人っているのかな？（後書き）

第三訓　違う世界に行っても似たようなことはあるもんだ（前書き）

シロ「さてさて今日も始まり始まり～」

第三訓　違う世界に行っても似たようなことはあるもんだ

銀時はズボンとワイシャツとだらしなくつけたネクタイ、ワイシャツの上には白衣といった服装をしながら昼間の表通りを歩いていた。

銀時は周りを見た、そこには西洋風の建物が並び、遠くには白い巨大風車やビルの群れ、青い空には電子掲示板がついた飛行船、近くにはドラム缶の形をしたゴミを拾ってるロボット。

「かなり技術が進んでんだなここ」

『たしかに、ここまで技術を進歩させたのは大したものです』

銀時とウォッチは周りの技術力を見て、感想を述べる。

「やっぱりここにも天人はいるのか…ってかお前人前で喋るなバレるだろ」

『大丈夫です。私の声は旦那さんだけに聞こえるようにしていますから』

銀時はこの世界にも天人（銀時の住んでる世界にいる宇宙人のこと）がいるのかと思ったあと、ウォッチに喋るなと警告する。

ウォッチは心配ご無用といった声色で銀時に言う。

「まあそれならいいか…おっ！あれは！」

銀時は納得した後、輝いた表情で何かを見つける。

銀時が目にしたのは本屋の表の本の棚にあった銀時の愛読書、『週

刊少年ジャンプ』だった。

『どうしたんですか？旦那さ…「ジャンプゥゥゥゥゥ！！」んんんんんん！！！？？』

ウォッチが言い切る前に銀時は本屋の前まで走り出した。ウォッチは銀時が急に走り出したためかなりへんな奇声を上げた。

「まさかここにもジャンプがあるとは、思ってもいなかったぜ」

銀時が本屋の表に置いてある棚の前まで来ると、ジャンプを手に入れようと手を伸ばそうとしたその時、銀時とは違う方向から誰かの手が伸びてきた。

そしてジャンプに伸びる、二本の手はピタッと止まった。

「「ん？」」

銀時と隣にいる少女は、互いに顔を見合わせた。

相手は茶髪で見た目は中学生で先ほど会った赤い髪の少女と同じ学生服を着ていた。だが銀時は少女の服装を見ても別にヤバいとは思わなかった。なぜなら、銀時はジャンプを読むことで頭がいっぱいだからだ。

「え？オタクジャンプ買いに？」

「アンタもジャンプ？」

銀時と少女は互いに目的が同じであることが分かった。

「まいったなー…一冊しかねぇや」

「どうする？」

一冊しかないジャンプをどうするか悩む二人。

「まあアンタには悪いけど、こういうのは普通は年下優先よね。じゃあそういうことで」

「オイオイ、ちょっと待てよ」

ジャンプを取り買うために銀時に背を向け本屋に入ろうとする少女の肩を掴み、銀時は言った。

「何よ？」

少女はしかめっ面で銀時の方を向く。

「何勝手に持ってこうとしてるんだ？コレは俺が先に見つけたジャンプだ。俺が貰ってく」

そして銀時もジャンプを少女にとられぬように強く掴んだ。

「は？何を言ってんのよアンタ。このジャンプは私が先にこの本屋で見つけた物よ。分かったらその手を離してくれないかしら？」

「テッメ……」

銀時は少女の言葉に青筋を浮かべた。銀時はひきつった笑みを浮か

べながら、ジャンプを掴んでる手に更に力を込め自分の元へと引き寄せる。

「馬鹿言ってんじゃねーぞ。俺なんか、この店を見つけた瞬間にジャンプの存在を感じ取ったんだよ。俺の方が早い！」

「何言ってんのよ。私はジャンプがあるこの地区に来た瞬間から知っていたわよ！」

「俺なんか、アレだよ？この世に生まれた瞬間から、この店の事知ってたよ？」

アホな言い合いを続けていく内に両者の中でイライラが募っていく。どちらも一歩も引き下がらないので、時間だけが過ぎていった。先にキレたのは銀時だった。

「いい加減にしろよクソガキ！お前みたいなガキにはジャンプなんて早えーんだよ！コ〇コ〇の〇ラえもんでも読んでいろや！」

「ガキっていうな！！私は中学生よ！！それよりその手を離しなさい！」

「お前がその手を離せ！そうすれば全てが丸くおさまるんだよ…ってあれ？これジャンプＮＥＸＴじゃね？」

「えっ！？　あ！本当にジャンプＮＥＸＴだわ…」

銀時と少女はジャンプを取り合い睨み合ってると、銀時が取り合っ

てるのがジャンプＮＥＸＴであることに気づく、少女は銀時の言葉に驚き、銀時からジャンプを奪い表紙を確かめるとそこにはジャンプＮＥＸＴと書いてあった。

「いや～最後のジャンプが買えて、本当によかったわ」

「「え？」」

銀時と少女は最後のジャンプを買ったという言葉を　聞き呆然とした表情で本屋の入り口を見た、そこにはジャンプを持ってる男子学生の姿があった。

「帰って読も」

そう言うと男子学生は呆然と突っ立っている銀時と少女の横を横切り帰っていった。

「あんたのせいで…」

「へ！？」

ジャンプＮＥＸＴを棚に戻したような音がした後、少女の怒りに満ちた声が銀時の前から聞こえてきたので銀時は前を見た、そこには顔を俯かせ拳を握りしめた怒りでプルプルと体を奮わせてる少女の姿があった。

「ま…まてガキ！ひとまず落ち着け！ここは冷静になれ！」

「誰がガキですって…？」
バチバチィッ
銀時は宥めようとしたつもりがさらに少女の怒りのボルテージをあげてしまい、体中を青白い光が纏い、前髪から電気を放ち初めている。これはまさしくぶちキレてるという証拠である。
（えぇぇぇぇ！？何、何なの！？こいつ体中から電気出てバチバチいってるんですけどォォォ！！）
銀時は驚いた表情をしながら心の中でそう思う。そして危機を感じたのか顔から一筋の汗を流し、後ろへと数歩後退りをする。
「だいたい私には…御坂美琴っていう名前があんのよっ！！！！」
少女の前髪から電撃がまるで槍のように銀時に向かって放たれた。
目標に向かっていく電撃の速さに成すすべがなく、電撃に当たり銀時は倒れる…はずだった。
「…え！そんな！」

御坂美琴と名乗る少女は驚いていた、なぜなら自分が見ている光景があまりにも信じられないものだからである。

「バッキャッロォォォ！！危ねーじゃねーか！！」

「私の電撃を避けた…」

そこには、美琴の電撃をなんとか避けた銀時がいた。美琴は自分の電撃が避けられたことを信じられずにいた。

（私の狙いがはずれたわけでも、あいつが軌道をずらしたわけでもないのにあの至近距離の電撃を避けるなんてあいつ本当に人間なの！？）

美琴は自分が狙いを定めて電撃を撃ったことの確認と、コンクリートの歩道に残る電撃の後を見て軌道をずらされていないことの確認をした後、至近距離の電撃を避けた銀時を見て本当に自分と同じ人間なのかと疑問に思う。

（まさか…あいつ能力者！？）

美琴は頭の中で一つの仮説を立てたその時。

「ねぇアンタ…」

美琴は銀時に声をかけようとするが銀時の姿はどこにも無かった。

美琴は能力者かどうか否かを知ることができなかった。ただ、一つだけ知ることができたことは

「に…逃げられたぁぁぁぁぁぁ！！」

銀時がこの場から逃げたことである。

☆

美琴から離れて１００メートルの場所。

「ふぅ…やっと逃げ切れたぜ」

逃げてきた銀時はこの場で止まり、汗を手で拭う。

「ちょっとそこのあなた」

「あ？」

銀時の後ろから誰かが声をかけてかたので銀時は後ろを振り向く。そこには、スーツ姿の男性が立っていた。

「誰だあんた？」

「申し遅れました私は九十九一（つくもはじめ）と申します。実はあなたに折り入って頼みがあります」

スーツ姿の黒縁メガネの男性は自己紹介をし、頼みがあると申し出

る。

「頼みだァ？」

銀時は言う。

「ええ…頼みというのは…」

この男性の頼みが思わぬことに繋がろうとは銀時はまだ何も思わなかったであろう。

第三訓　違う世界に行っても似たようなことはあるもんだ（後書き）

作者「こんな終わりかたになってすいません。でもネタバレにしたくはなかったので…」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2894y/

とある侍の銀魂 (シルバーソウル)

2011年11月17日19時12分発行